



「會津八一 人と業績」

會津 八一(あいづ やいち) 明治14年(1881)～昭和31年(1956)
 新潟市古町生まれ。明治39年、早稲田大学文学科卒業後、新潟県上越市(旧板倉町の有恒学舎=現県立有恒高校)の英語教師に。43年、有恒学舎を辞し、早稲田中学校に転職。大正7年、早稲田中学校教頭に就任。同9年から昭和25年頃まで頻りに奈良を訪れる。大正13年、歌集『南京新唱』刊行。大正15年から早稲田大学で東洋美術史の講座を担当。昭和6年に早稲田大学文学部教授となる。同8年、『法隆寺法起寺法輪寺建立年代の研究』を執筆し、翌9年文学博士に。同15年、歌集『鹿鳴集』、17年、随筆『渾齋随筆』、19年、歌集『山光集』を刊行。秋艸道人(しゅうそうどうじん)、渾齋(こんさい)、八朔郎(はっさくろう)などと号した。昭和20年、空襲により被災し、新潟に帰郷。同22年、歌集『寒燈集』、書画図録『遊神帖』を刊行。同26年、新潟市名誉市民第1号に。同年、『會津八一全歌集』を刊行、読売文学賞を受賞。同28年、宮中歌会始の召人として臨席。同31年に死去。享年75。

〈キリトリ線〉 ✂

2025年「會津八一の歌を映す」第19回 ■ 秋艸道人賞・写真コンテスト 応募票

申込者	氏名	(フリカナ)					
	性別	男・女	生年月日	年	月	日生	歳
住所	〒()						
職業							
TEL	—	—	FAX	—	—		
E-MAIL							
写真歴	年	プロ	アマ	いずれかに○をつけてください (統計資料にするため審査には関係ありません)			
撮影年月日	年	月	日				
テーマにした短歌							
撮影場所(どこから)							
被写体の名称所在地名(何を)							
このコンテストを、どこでお知りになりましたか。							

太線の枠内にもれなく記入の上、応募写真の裏側に写真の天地が分かるように軽く貼って提出してください

主催者受付専用記入欄

*受付:	年	月	日	*No.
------	---	---	---	------

公益財団法人 會津八一記念館
 〒950-0088 新潟市中央区万代3丁目1の1
 メディアシップ5階
 TEL.025-282-7612 FAX.025-282-7614
 info@aizuyaichi.or.jp



【第18回秋艸道人賞 受賞作品】
 江部 堅市氏(新潟県南魚沼市)
 「天地に われひとりみて 立つごとき このさびしさを 君はほほは笑む」

趣 旨

秋艸道人・會津八一は東洋美術史の研究者として世に知られ、早稲田大学の芸術学研究の基礎を築いた人物です。日本の伝統文化をこよなく愛し、斑鳩や奈良の地をたびたび訪れ、古代の仏像やその風情を歌によりみ、みずから筆をとり、書にしたためました。

古人は「詩は絵のごとく」と語っていますが、八一の歌はこの言葉を彷彿とさせるものがあります。さらに踏み込んで、そのイメージからは、風のそよぎ、あたりのかぐわしい香り、耳を澄ませば、しじまの中でのかすかなもの音まで聞こえてくる想いがします。また八一は「歌は読むものではなく耳で聴くもの」との信念から、音調美の表出を心がけており、齋藤茂吉は「その声調流動し、新鮮な果実の汁のごとし」と讃えています。

この八一の和歌の素晴らしさを、永遠に万人の胸にとどめてほしいという想いから、当記念館は平成19年度から「會津八一の歌を映す 秋艸道人賞・写真コンテスト」を開催しております。歌人あるいは俳人を顕彰するための、短歌や俳句のコンテストは全国各地で開催されていますが、「歌を映す」という試みは、この企画において他にはほとんどみられません。

八一の歌は、古代への憧憬にとどまりません。四季おりおりの自然に寄せる想い、戦争への怒りとむなしさ、混乱期に病死した養女への悲歌といった、生身の人間としての感慨を詠じた名歌も数多くあります。この写真コンテストのねらいは、八一の短歌をただ視覚的になぞるといったものではありません。八一の短歌のイラストではなく、その歌をモチーフに万人の心に響く心象風景を自在に映像化していただきたいというのが、このコンテストの趣旨です。

秋艸道人の歌については、會津八一記念館発行の『會津八一 悠久の五十首』や『秋艸道人會津八一美の彷徨』、村尾誠一・東京外国語大学名誉教授の『「會津八一」奈良大和を愛し、古寺巡礼の歌を詠う』がよい手引になると思います。前年度の入賞作品および、審査員の講評については、当記念館友の会・秋艸会の機関紙「秋艸」を取り寄せてご覧ください。

秋艸道人賞トライ(天乙女)原像



前文化庁長官 宮田亮平氏作



AIZU YAICHI MEMORIAL MUSEUM

作品受付期間

2025年
 11月1日(土)～
 11月12日(水)

締め切りの11月12日当日消印(または宅配受付・持参)有効。

主催:公益財団法人 會津八一記念館
 共催:新潟市、胎内市、新潟日報社、BSN新潟放送、八栗寺(香川県高松市)
 協賛:セコム上信越、コニカミノルタNC
 協力:今成漬物店、大阪屋、里仙、葵酒造、新潟フジカラー、株式会社 中村屋
 後援:朝日新聞新潟総局、毎日新聞新潟支局、読売新聞新潟支局、産経新聞新潟支局、日本経済新聞新潟支局、共同通信社新潟支局、時事通信社新潟支局、NHK新潟放送局、NST新潟総合テレビ、TeNYテレビ新潟、UX新潟テレビ21

2025年「會津八一の歌を映す」

■ 第19回 ■

秋艸道人賞・写真コンテスト

公益財団法人 會津八一記念館

2025年「會津八一の歌を映す」第19回 秋艸道人賞・写真コンテスト

■ 公募規定 以下1～17の規定に同意することを条件とします。

1. 目的

本賞は東洋美術史家、歌人、書家であった會津八一の短歌のイメージを写真で表すことによって八一の業績を理解してもらい、八一に親しみを持ってもらう活動の一環です。美術や文学をテーマにした写真の普及を奨励し、併せて會津八一の業績を今日的に再生させることが目的です。最高賞の名称を會津八一の号にちなみ「秋艸道人賞」とします。

2. 主催、共催、協賛、協力、後援

主催 公益財団法人 會津八一記念館
共催 新潟市、胎内市、新潟日報社、BSN新潟放送、八栗寺（香川県高松市）
協賛 セコム上信越、コニカミノルタNC
協力 今成漬物店、大阪屋、里仙、葵酒造、新潟フジカラー、株式会社 中村屋
後援 朝日新聞新潟総局、毎日新聞新潟支局、読売新聞新潟支局、産経新聞新潟支局、日本経済新聞社新潟支局、共同通信社新潟支局、時事通信社新潟支局、NHK新潟放送局、NST新潟総合テレビ、TeNYテレビ新潟、UX新潟テレビ21

3. 応募資格

プロ、アマを問いません。

4. 応募条件

- ① 応募写真はすべて個人の投稿制とします。
- ② 応募者は応募作品の制作者であり、かつ応募作品の著作権を完全に保有していること。
- ③ 作品は『會津八一悠久の五十首』（旧版とその一部を差し替えた改訂版）、『秋艸道人會津八一 美の彷徨』（ともに新潟日報事業社・現新潟日報メディアネット刊）、『「會津八一」奈良大和を愛し、古寺巡礼の歌を詠う』（笠間書院）に収められている短歌（一部対象外の作品あり 右ページをご参照ください）をテーマにしたものに限り、1首につき1作品とし、応募者1人2首2作品まで応募できます。
- ④ 応募作品には、裏面の応募票（テーマにした會津八一の短歌、撮影の日時と地名、被写体の名称=寺院名、仏像名など=を必ず記入する）を必ず作品の裏面に写真の天地が明確になるように貼りつけてください。2首2点を同時に応募する場合は1点ごとに応募票を貼りつけてください。
- ⑤ 被写体（寺院、仏像、人物など）に対しては応募者が了解をおとりください。
- ⑥ サイズは半切印画紙（356×432mm）にプリントしたものに限り、規格外サイズや額入り、台紙やパネルに貼ったものは審査の対象外とします。
- ⑦ 作品は入選歴のない未発表作品に限り、応募作品は、規定1～17に同意しているものとして扱います。

5. 応募方法

応募者は郵送か宅配便で当記念館に送付、または持参すること。送付費用は応募者が負担してください。郵送の場合は必ず書留にしてください。

6. 応募費用

無料です。

7. 応募受付期間

2025年11月1日（土）から11月12日（水）まで。
締め切りの11月12日当日消印（または宅配受付・持参）有効。

8. 賞の構成

秋艸道人賞 1点
正賞：「天つ乙女」像（前文化庁長官・宮田亮平氏作）と賞状、副賞：10万円
奨励賞（共催団体名付き） 5点 賞状 副賞：各3万円
（共催の八栗寺からは「八栗寺わたつみ賞」が贈られます。賞の名前の由来については右ページ枠下に記しています）
※特別賞（奨励賞と同等）を設ける場合があります。

◆秋艸道人賞および奨励賞受賞者が表彰式・祝賀会に出席する際の交通費・および県外在住者の宿泊費（1泊分）は、主催者が負担します。

入選 約20点
賞状、副賞（會津八一ゆかりの商品）

9. 審査員

浅井 慎平 写真家
若松 保広 仏教美術写真家（奈良・飛鳥園専属）
村尾 誠一 東京外国語大学名誉教授
野中 浩俊 新潟市會津八一記念館館長（新潟大学名誉教授）

10. 審査

審査選考は會津八一記念館が設ける公募写真選考委員会の責任と権限において合議で行われ、秋艸道人賞（最優秀賞）および奨励賞、入選作品を決めます。

11. 発表

2025年12月中旬（予定）、当館の公式ウェブサイト、新聞報道および個人宛てに通知。

12. 表彰式・講評会・祝賀会

2026年1月末～2月上旬（予定）、会場は新潟市内の施設。

13. 返却

事務局態勢上、応募作品は返却できませんのでご了承ください。

14. 展示

入賞・入選作品は当記念館と、翌年度内に全国の巡回展会場で展示します。

15. 著作権と出版権

受賞作品の著作権は制作者本人に帰属します。ただし公益財団法人會津八一記念館の広報活動のための出版物等に無償で活用させていただきます。当館刊行以外の出版物へ転載等する場合は制作者の同意を前提とします。

16. 個人情報

応募者から提供された個人情報は今後の「秋艸道人賞」写真コンテストの公募告知および會津八一記念館の各種事業の告知に利用することがあります。

17. 作品の送付先と問い合わせ先

〒950-0088 新潟市中央区万代3丁目1の1 メディアシップ5階
（公財）會津八一記念館
「秋艸道人賞」事務局 電話 025(282)7612
ファクス 025(282)7614
e-mailアドレス info@aizuyaichi.or.jp

第18回 受賞作品



【新潟市長賞】
二瓶純緒氏（新潟市江南区）
「瀧川の底をどみに、白妙のものかたちの、見ゆるかなしさ」



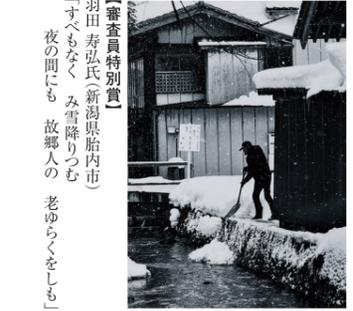
【胎内市長賞】
藤井則子氏（新潟市西蒲区）
「近づきて、仰きみれども、みほとけの、みそなはずすとも、あらぬさびしさ」



【新潟日報社賞】
山口晴久氏（大阪府池田市）
「みどらしの、進に残る、褪せ色の、緑な吹きそ、木枯らしの風」



【BSN賞】
風間基和氏（新潟市西区）
「近づきて、仰きみれども、みほとけの、みそなはずすとも、あらぬさびしさ」



【審査員特別賞】
羽田寿弘氏（新潟県胎内市）
「すべもなく、み雪降りつむ、夜の間に、故郷人の、老ゆらくをしも」



【八栗寺わたつみ賞】
山口よつ子氏（新潟市西区）
「我妹子をしめかへは、入日さし、紅葉は燃えぬ、わが窓のもの」

◆ 参考書籍は3冊

第16回から審査員に東京外国語大学名誉教授の村尾誠一先生が加わりました。それに伴い、村尾先生の『「會津八一」奈良大和を愛し、古寺巡礼の歌を詠う』（笠間書院）を参考書籍に加えました。『改訂版 會津八一悠久の五十首』『秋艸道人會津八一 美の彷徨』（ともに新潟日報事業社・現新潟日報メディアネット刊）會津八一記念館で取り扱いは従来通りです。『悠久の五十首』は102ページまでの短歌（50首）を、『美の彷徨』と村尾先生の著書では、取り上げている短歌のみをモチーフの対象とします。対象となる短歌の数が増えました。力作をお待ちします。以下は、八一の原点ともいえる奈良、そして京都・大阪で詠まれた歌のうち碑となっている21首です（カッコ内は所在地。※これらの地域にある碑でも、上記3冊が取り上げられていない歌は省きました）。

- 秋篠の み寺をいでて かえりみる 生駒が岳に 日は落ちんとす（秋篠寺）
- 天地に われひとりいて 立つごとき このさびしさを 君はほほは笑む（法隆寺）
- いかるがの 里のをとめは 夜もすがら 衣機織れり 秋ちかみかも（上宮遺跡）
- 厩戸の 皇子のまつりも 近づきぬ 松みどりなる 斑鳩の里（法隆寺iセンター）
- 大寺の 円き柱の 月影を 土にふみつ つ ものをこそ思え（唐招提寺）
- 大らかに もろ手の指を 開かせて 大きほとけは 天足らしたり（東大寺）
- 春日野に おし照る月の ほがらかに 秋の夕べと なりにけるかも（春日大社）
- 春日野の 夜を寒みかも さ牡鹿の 街の巷を 鳴きわたりゆく（飛鳥園）
- 観音の 白き額に 環珞の 影動かして 風わたる見ゆ（法輪寺）
- しぐれの雨 いたくな降りそ 金堂の 柱の真緒 壁に流れん（海龍王寺）
- 水煙の 天つ乙女が 衣手の ひまにも澄める 秋の空かな（兼勝寺）
- たち入れば 暗きみ堂に 軍茶利の 白き牙より ものの見えくる（京都東寺）
- 近づきて 仰き見れども みほとけの みそなはずすとも あらぬさびしさ（新薬師寺）
- 千年あまり 三たびめぐれる 百年を ひと日のごとく 立てるこの塔（法隆寺）
- 奈良坂の 石のほとけの おとがいに 小雨流るる 春は来にけり（般若寺）
- なまめきて 膝にたてたる 白妙の ほとけの脇は うつつともなし（大阪観心寺）
- 春来ぬと 今か諸人 ゆきかえり ほとけの庭に 花咲くらしも（興福寺）
- ひとり来て 悲しむ寺の 白壁に 汽車のひびきの 行きかえりつつ（喜光寺）
- 藤原の 大き后を 現し身に 相見ることく 赤きくちびる（法華寺）
- みほとけの あごとひじとに 尼寺の 朝の光の ともしきろかも（中宮寺）
- 吾妹子が 衣掛柳 みまく欲り 池をめぐりぬ 傘さしながら（猿沢池）

八栗寺の梵鐘には會津八一がしたためた銘文と、八一最後となった歌（原文は平仮名）が鐫込まれています。
〈わたつみの 底ゆく魚の 鱸にさへ ひびけこの鐘 仏法のみために〉
（「秋艸道人會津八一 美の彷徨」138ページ）。賞の名称はこの歌から取りました。